

制御焦点と集団内における社会的交換

—寄付シナリオ実験による検討—

佐藤 有紀¹⁾ 五十嵐 祐²⁾

問題と目的

集団内の協力

集団内成員の助け合い、すなわち協力は、職場組織の発展 (Adler & Kwon, 2002; Cohen & Prusak, 2001; Nahapiet & Ghoshal, 1998) や、地域の福利厚生 (Coleman, 1988; 稲葉, 2011; Putnam, 2000) など、様々な文脈において重要である。こうした人々のつながりが個人や集団にもたらす利益は、社会関係資本 (social capital) と呼ばれ、近年重要視されている。本研究では、集団内での協力を規定する行為者要因について、実証実験をもとに検討する。

集団内成員の協力は、情報や物資の社会的交換という観点から考えることができる。ある個人が、コスト c を負って他者に利益 b を送ったとき (このとき $0 < c < b$)、相手もまたコスト c を負って利益 b を返報すれば、互いに $b - c$ の純利益 (net benefit) を得ることができる。しかし、相手が返報をしてくれなければ、行為者は $-c$ のコストを負う一方で、相手は b の純利益を得ることになり、行為者は相手に搾取されることになってしまう。

これに対して、協力相手からの返報を見込まない一方的な協力も存在する。これは自身の評判を高めるための戦略とみなすことができる (Nowak & Sigmund, 2005)。行為者は他者に協力することで、協力的な人物としての評判を形成し、第三者から返報を受けることができる (Wedekind & Milinski, 2000)。さらに、集団全体の利益 (i.e., 公共財) に貢献するような行動も、集団内の他者から返報される可能性を高める (Milinski, Semmann, & Krambeck, 2002)。このように、第三者から間接的に返報を受けるという点で、協力相手から返報を受けない一方的な協力も、社会的交換の一側面と考えることができる。

協力の個人差

行為者は、社会的交換における協力のコスト、被搾取のリスク、そして返報による利益などを総合的に勘案し、行動を決定する。社会的交換状況に含まれるどのような側面に敏感になり、どのような戦略を選択するかは、行為者の自己制御の指針である制御焦点 (Higgins, 1997) によって異なると考えられる。そこで本研究では、行為者の自己制御傾向が協力を規定するという観点から、制御焦点が協りに影響を及ぼす可能性を検討する。

制御焦点理論 (Higgins, 1997) は、利得の存在に接近し、利得の不在を回避しようとする促進焦点と、損失の不在に接近し、損失を回避しようとする予防焦点という2つの自己制御システムを提唱する。促進焦点は、利益へのポジティブ認知 (Idson, Liberman, & Higgins, 2004)、リスクテイキング傾向 (Crowe & Higgins, 1997)、抽象的・大域的な情報処理 (Förster & Higgins, 2005)、状況の変化への選好 (Liberman, Idson, Camacho, & Higgins, 1999)などを駆動する。一方、予防焦点はコストへのネガティブ認知、リスク回避傾向、具体的・局所的な情報処理、状況の安定への選好などを駆動する。また、自身の理想や希望を含む最大目標 (maximal goal) の追求は促進焦点と、義務や責任を含む最小目標 (minimal goal) の追求は予防焦点と関連している (Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molden, 2003)。

促進焦点と予防焦点が駆動する2つの自己制御のモードは、それぞれ社会的交換状況に内在するコストやリスク、利益への認識を変化させ、協力傾向に影響を与える可能性がある。本研究では、集団内での自発的な協力行動である向社会的行動と、それに対する他者からの返報の期待に、行為者の制御焦点が与える影響を検討する。

社会的交換の形態

先行研究において、社会的交換は2つの基本的形態に分類される。一つは、固定された二者間で起こる限定交換 (restricted exchange) である。もう一つは、一般交換 (generalized exchange) と呼ばれる、二者間の直接的な貢献・返報という一対一の対応が欠如した交換関係

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 五十嵐祐准教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

である (Ekeh, 1974)。前者の社会的交換は直接互惠性 (direct reciprocity; DR) によって、後者は間接互惠性 (indirect reciprocity) によって成立する。

近年では、間接互惠性をさらに二種類に分類することが提唱されている (Stanca, 2009)。一つは、人物Aが人物Bに貢献した時、次に第三者CがAに返報するという互惠性の形態であり、socialized indirect reciprocity (SIR) と呼ばれる。この現象は、「情けは人のためならず」といったことわざで表現される。AはBに貢献することで、協力的な人物としての評判を高めることができる。第三者CはこうしたAの評判を聞きつけ、自分に返報があることを期待して、Aに協力する (Wedekind & Milinski, 2000)。行為者はこのような評判を介した間接互惠性が成立することを認識しており、評判が機能する状況では他者に協力的にふるまう傾向がある (Engelmann & Fischbacher, 2009)。

もう一つは、人物Aが人物Bに貢献した時、Bが第三者Cに貢献するという互惠性の形態であり、generalized indirect reciprocity (GIR) と呼ばれる。これは、BがAから受けた恩を、Aではなく第三者であるCに返報するといった現象であり、一般的に「恩送り」という言葉で表される。こうした返報行動は、高次の認知機能を有さないフサオマキザルや幼児においてもみられるが (Leimgruber, Ward, Widness, Norton, Olson, Gray, & Santos, 2014)、進化的適応の観点からこの互惠性を説明することは困難であり、説明原理が議論されている。近年では、SIRとGIRの行使では脳の神経基盤が異なることが示唆され、SIRの行使の際は、行為者は理論的な損得計算に関連する背側楔前部が活性化し、GIRの行使の際は、共感に関連する前島皮質が活性化することが明らかになっている (Watanabe, Takezawa, Nakawake, Kunimatsu, Yamasue, Nakamura, Miyashita, & Masuda, 2014)。

このように、直接互惠性 (DR) と2つの間接互惠性 (SIR, GIR) は、それぞれ生起メカニズムが異なることが示唆されている。本研究では、行為者の制御焦点が、向社会的行動のみならず、これら3つの互惠性によって生じる返報への期待に及ぼす影響についても、併せて検討する。

制御焦点と社会的交換

まず、集団内において向社会的行動を行う際、行為者の負うコストは抑制因となりうる (Dovidio, Piliavin, Schroeder, & Penner, 2006; Sober & Wilson, 1998)。予防焦点の優勢な者は、自身がコストを負うことに敏感であり、これをネガティブに評価する傾向がある (Idson et al., 2004)。一方で、促進焦点の優勢な者は、自身が負担するコストよりも、向社会的行動を行ったり、そ

の返報を受けたりすることで、集団全体や自身が受ける利益の大きさに着目する可能性がある (Gu, Bohns, & Leonardelli, 2013)。したがって、促進焦点の優勢な者の方が、向社会的行動を起こしやすいと考えられる。

この仮説を支持する証拠は、いくつかの先行研究で示唆されている。たとえば Gorman, Meriac, Overstreet, Apodaca, McIntyre, & Godbey (2012) は、従業員の促進焦点が産業組織内での組織市民行動 (i.e., 他の従業員の援助や職場集団への協力) に正の影響をもたらすことを示した。また佐藤・五十嵐 (2014) は、従業員の促進焦点が、他者からの返報の期待を媒介して、職場内の他者への援助行動を駆動することを明らかにした。したがって、促進焦点の優勢な者の方が、予防焦点の優勢な者より、集団内で向社会的行動を行うことが予測される (仮説1)。

次に、行為者の制御焦点が社会的交換に及ぼす影響について検討するために、制御焦点と返報の期待の関連について概観する。まず、促進焦点の優勢な者は、常に利益が得られる可能性を模索するため、行動を起こすこと (Roese, Hur, & Pennington, 1999) や、状況を変化させること (Lieberman et al., 1999) への選好があり、楽観主義傾向が強い (Grant & Higgins, 2003)。こうした行動傾向は、資源を保持するよりも、被搾取のリスクを恐れずに、他者と社会的交換を行うことへの選好を生み出す可能性がある。これに対して、予防焦点はリスク回避傾向と関連する (Crowe & Higgins, 1997)。そのため、予防焦点の優勢な者は、他者からの返報を多くは期待しない可能性がある。以上のことから、促進焦点の優勢な者は、予防焦点の優勢な者よりも、他者からの返報を高く見積もる可能性が予測される (仮説2)。

さらに、行為者の制御焦点は、先述した3種類の互惠性に対して、異なる認識を喚起する可能性がある。まず、自身が貢献した相手からの直接的な返報 (DR) について、促進焦点の高い者は、利益への敏感さや強い楽観主義の観点から、相手への返報を期待するであろう。これに対して、予防焦点の高い者は、集団成員としての義務の観点から、相手への返報がなされるべきと考えられる可能性が高い。したがって、DRについては、促進焦点の優勢な者も、予防焦点の優勢な者も、同様に高い期待を持つと考えられる。

しかし、第三者からの間接的な返報 (SIR) に関しては、促進焦点の優勢な者と予防焦点の優勢な者で、異なった期待を持つ可能性がある。先行研究において、促進焦点は大域的・抽象的な情報処理を駆動し、予防焦点は局所的・具体的な情報処理を駆動することが示されている (Förster & Higgins, 2005)。このことは、集団を自

由な社会的交換が可能なネットワークとして全体的に捉えるか、自分が貢献した相手とそれ以外の者として局所的に捉えるかに影響を及ぼす可能性がある。実際、促進焦点は開かれた人間関係において利益の可能性を追求することと関連する一方、予防焦点は既存の関係性を保持するために義務や責任の感覚を喚起するという示唆がなされている(増田・山岸, 2010)。予防焦点の優勢な者は、誰が誰に貢献したかを重視し、その中での互恵性を確立させようとする一方で、第三者からの返報といった、自由な社会的交換において得られる利益には期待しない可能性が高い。したがって、予防焦点の優勢な者は、SIRを、DRよりも低く見積もるだろう。

さらに、貢献した相手の第三者に対する返報(GIR)に関しても、促進焦点の優勢な者と予防焦点の優勢な者で、自身が貢献した者のふるまいをどのように推測するかが異なる可能性がある。促進焦点と予防焦点が駆動する情報処理の違いは、対人認知にも影響を及ぼすことが推測される。たとえば、大域的な情報処理をプライミングされた者は他者との類似点に反応しやすく、局所的な情報処理をプライミングされた者は他者との相違点に注目しやすい(Förster, Liberman, & Kuschel, 2008)。この知見をもとにすると、促進焦点の優勢な者は、自身が貢献した相手も自身と同様に、第三者に対して協力的にふるまうと推測する可能性がある。しかし、予防焦点の優勢な者は、貢献を受けた者を自身とは異なる立場として捉える可能性が高い。この場合、貢献を受けた者がコストを負って第三者に返報する理由は見つけにくいから、第三者への返報を低く見積もると考えられる。以上の議論から、促進焦点条件の参加者は、すべての種類の互恵性において、他者からの返報を同様に高く見積もると考えられる。一方、予防焦点条件の参加者は、DRよりもSIR、GIRにおいて、他者からの返報を低く見積もることが予測される(仮説3)。

本研究の仮説

本研究では、寄付行為に関するシナリオを用いた質問紙実験で、以下の3つの仮説を検討する。寄付行為は、自身の負うコストや他者に送られる利益が明白であり、向社会的行動の指標として適切であると考えられる。

仮説1. 促進焦点条件の参加者の方が、予防焦点条件の参加者よりも、寄付額が大きい。

仮説2. 促進焦点条件の参加者は、すべての種類の互恵性(DR, SIR, GIR)において、予防焦点の参加者よりも返報期待額を高く見積もる。

仮説3. 促進焦点条件の参加者は、すべての種類の互恵性において、返報期待額を同程度に見積もる。一方、

予防焦点条件の参加者は、DRよりもSIR、GIRにおいて、返報期待額を低く見積もる。

方 法

実験参加者および実験状況

実験参加者は女子大学生41名であった。実験は、愛知県内の大学で行われた心理学系の授業の一部を使って、集団実験として実施された。実験マテリアルはすべて質問紙に印刷された形で用いられた。

手続き

本研究では、2つの課題を用いて回答者の制御焦点を操作した後、参加者と同じ大学に所属する学生が自然災害により被災するというシナリオの下で、被災者学生への寄付額と、DR, SIR, GIRにおける返報期待額を測定した。

参加者には、制御焦点を操作するための質問紙Aと、向社会的行動と返報の期待を測定するための質問紙Bが配布された。これらの2種類の質問紙は、相互に無関係の課題であると教示された。参加者は、実験者の指示に従って、全員が同じペースで回答を行い、質問紙A、質問紙Bの順に回答した。その後、参加者は一般的信頼尺度6項目(山岸, 1998)に5件法で回答した。一般的信頼は、社会的ジレンマにおける協力傾向に影響を与えることが明らかになっており(山岸, 1998)、向社会行動や返報の期待に影響を及ぼす可能性が高いため、本研究では統制変数として測定した。最後にデブリーフィングを行い、実験は終了した。

制御焦点の操作

質問紙Aでは、参加者の制御焦点を実験的に操作するため、2種類の課題を実施した。まず、理想自己/義務自己記述課題(尾崎・唐沢, 2012)を6分間実施した。この課題では、参加者は過去(中学・高校時代)、現在、将来(大学卒業後)の3時点において、自身がこうありたいと思う理想(促進焦点条件)もしくはこうあらねばならないと思う義務(予防焦点条件)について自由記述で回答した。

つづいて、各制御焦点にフレーミングされた迷路課題(Friedman & Förster, 2001)を3分間実施した。促進焦点条件の参加者には、迷路の出口に肉(利益の象徴)のイラストが追加されており、肉を多く集めるために、なるべく早く多くの迷路を解くよう求められた。予防焦点条件の参加者は、迷路の入り口にライオン(リスクやコストの象徴)のイラストが追加されており、ライオンから逃げ切るために、なるべく早く多くの迷路を解くよう求められた。

向社会的行動と返報の期待の測定

質問紙Bでは、向社会的行動を測定するための寄付シナリオ課題が実施された。参加者は、知り合いではないが同じ大学に所属する学生が自然災害で被災し、金銭的に困窮するというシナリオを読んだ後に、自分の自由になる金額（10万円）の中から、いくら被災学生に寄付するかを、1,000円単位で回答した。なお、寄付をしたくない場合は0円と回答することも可能であった。併せて、その金額を寄付すると回答した理由について、自由記述で回答を求めた。

参加者はその後、評判が公開される状況、すなわち、自分の寄付行為が学内の広報誌に取り上げられたというシナリオのもとで、(1) 将来自分が同じように被災した時に、被災学生はいくら自分に寄付してくれると思うか（DR返報期待額）、(2) 将来自分が同じように被災した時に、大学内の無関係の学生（第三者）がいくら自分に寄付してくれると思うか（SIR返報期待額）、(3) 将来大学内の無関係の学生が被災した時に、被災者学生はい

くら寄付すると思うか（GIR返報期待額）という3種類の互恵性における返報期待額を回答し、その理由を自由記述で回答した。なお、返報期待額の回答範囲は、寄付額の回答範囲と同様に、10万円とした。

結果

実験参加者41名のうちの2名は、「相手が寄付をするといっても、自分が受け取らない」という理由で返報期待額を0円と記入しており、返報者の意図を推測させる本研究の目的に合致していなかったため、分析対象から除外した。最終的に、促進焦点条件には19名、予防焦点条件には20名の参加者が割り当てられた。過去に寄付経験のある者は30名、ない者は9名であった。被寄付経験のある者は1名、ない者が38名であった。

主な変数の記述統計量を、制御焦点の条件別にTable 1に示す。また、主な変数間の相関係数をTable 2に示す。年齢、寄付経験、被寄付経験、一般的信頼などの個人要因は、寄付額や返報期待額に影響を及ぼしていなかった。

Table 1 制御焦点の条件別の主な記述統計量

	促進焦点条件		予防焦点条件	
	M	(SD)	M	(SD)
年齢	19.58	(0.84)	19.70	(0.98)
寄付額 (円)	24157.89	(25107.02)	5650.00	(5333.85)
DR 返報期待額 (円)	19842.11	(25977.05)	4650.00	(5833.43)
SIR 返報期待額 (円)	17263.16	(20880.19)	3350.00	(3731.45)
GIR 返報期待額 (円)	26000.00	(27432.75)	5300.00	(6562.25)
一般的信頼 ($\alpha = .83$)	3.31	(0.54)	3.18	(0.81)

DR = direct reciprocity, SIR = socialized indirect reciprocity, GIR = generalized indirect reciprocity

Table 2 主な変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 年齢								
2. 制御焦点条件 (促進焦点 = 1, 予防焦点 = 0)	-.07							
3. 寄付経験 (有 = 1, 無 = 0)	.19	.29 †						
4. 被寄付経験 (有 = 1, 無 = 0)	.43 **	-.16	.09					
5. 一般的信頼	-.32 *	.10	.00	-.18				
6. 寄付額	-.06	.47 **	.21	-.10	.13			
7. DR 返報期待額	.25	.39 *	.17	-.09	.23	.89 ***		
8. SIR 返報期待額	-.24	.43 **	.20	-.08	.11	.90 ***	.89 ***	
9. GIR 返報期待額	-.12	.47 **	.26	-.08	.23	.91 ***	.90 ***	.87 ***

n = 39, † p < .10, * p < .05, ** p < .01, *** p < .001

DR = direct reciprocity, SIR = socialized indirect reciprocity, GIR = generalized indirect reciprocity

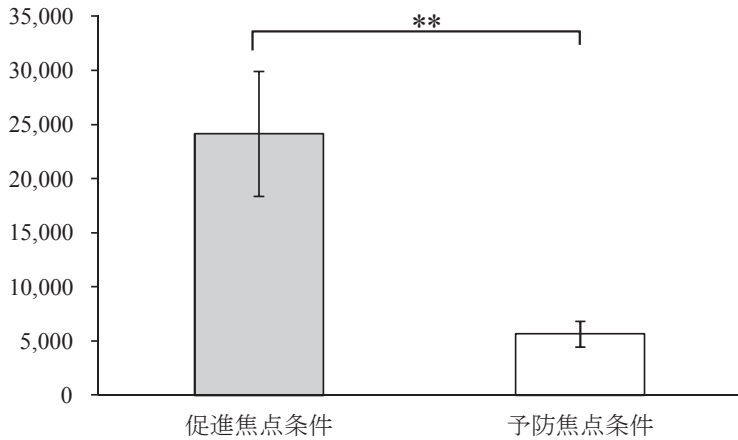
したがって、以降の分析ではこれらの個人要因を含めずに、制御焦点と寄付額との関連を検討した。

仮説の検討

まず、促進焦点条件と予防焦点条件において、寄付額がどのように異なるか（仮説1）を検定するため、制御焦点を独立変数、寄付額を従属変数とするt検定を行った。その結果、促進焦点条件の参加者の方が、予防焦点条件の参加者よりも寄付額が高いことが明らかとなった

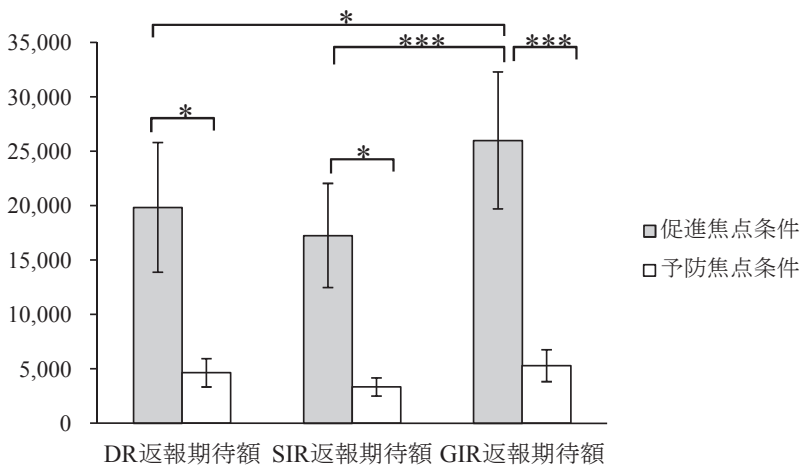
($t(19.543) = 3.15, p = .005, d = 1.06$; Figure 1)。したがって、仮説1は支持された。

次に、制御焦点と返報の期待との関連（仮説2, 3）を検討するために、返報期待額の値を従属変数とする、2（制御焦点:促進焦点, 予防焦点; 被験者間要因）×3（互惠性: DR, SIR, GIR; 被験者内要因）の分散分析を行った（Figure 2）。その結果、参加者の制御焦点と互惠性の種類の交互作用が有意傾向を示した ($F(2, 74) = 2.56,$



** $p < .01$, エラーバーは標準誤差を表す
DR = direct reciprocity, SIR = socialized indirect reciprocity,
GIR = generalized indirect reciprocity

Figure 1 促進焦点条件と予防焦点条件の参加者の平均寄付額 (円)



* $p < .05$, *** $p < .001$, エラーバーは標準誤差を表す
DR = direct reciprocity, SIR = socialized indirect reciprocity,
GIR = generalized indirect reciprocity

Figure 2 各互惠性における促進焦点条件と予防焦点条件の参加者の平均返報期待額 (円)

$p = .084$; $\eta_p^2 = .065$)。そこで、各互恵性の返報期待額における制御焦点の単純主効果を検討したところ、すべての種類の互恵性において制御焦点の主効果が有意であり ($F(1, 46) > 5.94$, $ps < .019$)、いずれの種類の互恵性においても、促進焦点条件の参加者の方が、予防焦点条件の参加者よりも返報期待額を高く見積もっていた。したがって、仮説2は支持された。

さらに、各制御焦点条件における互恵性の種類の単純主効果を検討したところ、促進焦点条件における互恵性の種類の主効果が有意であった ($F(2,74) = 7.73$, $p < .001$)。TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、促進焦点条件においては、GIR返報期待額が、SIR返報期待額 ($p < .001$) やDR返報期待額 ($p < .021$) よりも有意に大きかった。一方、予防焦点条件においては、互恵性の種類による返報期待額の差は有意ではなかった ($F(2,74) = 0.40$, $p = .673$)。したがって、仮説3は支持されなかった。

考 察

本研究では、仮説1および2が支持され、促進焦点条件の参加者の方が、予防焦点条件の参加者よりも多くの寄付額を提示していた。また、3種類の互恵性における返報期待額について検討した結果、促進焦点条件の参加者は、予防焦点条件の参加者よりも、将来、多くの返報を受けることを期待することが明らかとなった。他者との社会的交換では、資源を提供するコストを負う代わりに、他者の持つ資源を利用することが可能になるため、利益を得ることができる。促進焦点の優勢な者は、利益の側面に注目することで、資源を他者と交換することを選択し、自身が多く他者に資源を提供するとともに、他者からも将来的に多くの返報を受けることを期待すると考えられる。一方、予防焦点の優勢な者は、社会的交換のコストの側面に注目することで、資源の保持を好み、他者に資源を多く提供せず、将来的な返報を期待しないと考えられる。

制御焦点の3種類の互恵性における返報の期待の関連については、本研究の仮説とは異なるが、興味深い示唆が得られた。促進焦点条件の参加者は、直接的には自身の利益とならない第三者への返報 (GIR) が成立するという期待を高めていた。これは、促進焦点が社会的勢力への選好を強めることと関係するかもしれない (Leikas, Lonnqvist, Verkasalo, & Lindeman, 2009)。促進焦点の優勢な者は、自分の向社会的行動が、その相手のみならず、第三者にまで影響を及ぼすと期待し、このことが向社会的行動を行う一つの動機づけとなっている可能性がある。また、促進焦点の優勢な者は、集団

全体が享受する利益の多寡を重視する傾向がある (Gu et al., 2013)。特に、同じ大学の学生といった社会的カテゴリ集団 (social category group) の顕在化は、社会的アイデンティティを強く喚起することが示されている (Johnson, Crawford, Sherman, Rutchick, Hamilton, Ferreira, & Petrocelli, 2006)。したがって、自身の利益よりも内集団の利益を考慮する傾向が強まった結果 (Tajfel & Turner, 1979)、促進焦点の優勢な者は、自身が貢献した相手が、内集団の第三者に対して将来より多くの貢献を行い、集団全体の利益が高まることを期待した可能性がある。

一方、本研究の予測 (仮説3) に反し、予防焦点の優勢な者は、互恵性の種類にかかわらず、同程度の返報が成立するという期待を抱いていた。この点に関しては、予防焦点が義務の遂行と関連するという側面から解釈できる (Higgins et al., 2003)。すなわち、予防焦点条件の参加者が回答した寄付額や3種類の互恵性における返報期待額は、社会的交換における貢献と返報の関係から判断されたものではなく、むしろ集団内に不遇な成員が存在する場合、他成員が義務として行うべき最低限の援助、すなわち最小目標に基づいて判断された可能性がある。この場合、予防焦点の優勢な者は、互恵性の種類とは関係なく、いずれの状況でも不遇な成員には同程度の援助を提供すべきと判断するだろう。本研究がもともと想定していたように、制御焦点が情報処理や対人認知の傾向を変化させ、返報の期待に影響を及ぼすプロセスを検討するには、有用な情報の交換など、義務や責任の感覚を喚起しない社会的交換場面を題材として、改めて仮説を検討する必要がある。

本研究の限界

本研究は、手続き的な問題点を3つ含む。まず、本実験では制御焦点を操作しない統制群を設けていない。したがって、促進焦点群の参加者と予防焦点群の参加者が、いずれの自己制御も駆動されていないニュートラルな状態にある者と比べて、どの程度他者への貢献をし、返報を期待するのかわからない。今後の研究では、促進焦点と予防焦点を喚起された者と、ニュートラルな状態にある者との比較検討を行うことが必要である。

次に、本研究では制御焦点の操作後に、操作チェックを行っていない。従来の研究では、制御焦点の操作によって、情報処理傾向 (Crowe & Higgins, 1997) や課題の好み (Freitas & Higgins, 2002) などが変化することで、制御焦点の操作に成功したとみなし、操作そのもののチェックは行われない傾向があった。今後の研究では、これらの先行研究と同様の課題を事後に実施することで、制御焦点の操作が成功したことを担保する必要がある。

あるだろう。また本研究では、DR、SIR、GIRにおける返報の期待を測定する際に、カウンターバランスを考慮していない。したがって、3つの互恵性の提示順序を変更しても、本研究の知見が再現されることを確認する必要がある。

最後に、本研究では、サンプル数の少なさもあり、特に促進焦点条件の参加者間で、寄付額や返報期待額の分散が大きかった。このことは、向社会的行動や返報の期待の測定、また統計的検定の適用に関し、結果の妥当性を担保できない可能性を提起する。本研究では、知見の生態学的妥当性を担保するために、実生活に近似した寄付シナリオを用いて検討を行ったが、今後の研究では、一般的な投資ゲーム (Berg, Dickhaut, & McCabe, 1995) などによる検討を行う必要がある。また、本研究では参加者に実際の募金を求めなかった。向社会的行動をより厳密に測定するためには、実験謝礼から実際にいくら募金するかを観測するなどの手法 (e.g., 白木・五十嵐, 2014) を用いることも必要であろう。

引用文献

- Adler, P. S., & Kwon, S. W. (2002). Social capital: Prospects for a new concept. *Academy of Management Review*, 27, 17-40.
- Berg, J., Dickhaut, J., & McCabe, K. (1995). Trust, reciprocity, and social history. *Games and Economic Behavior*, 10, 122-142.
- Cohen, D., & Prusak, L. (2001). *In good company: How social capital makes organizations work*. Harvard Business Press.
- Coleman, J. S. (1988). Social capital in the creation of human capital. *American journal of sociology*, 95, S95-S120.
- Crowe, E. & Higgins, E. T. (1997). Regulatory focus and strategic inclinations: promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Making*, 69, 117-132.
- Dovidio, J. F., Piliavin, J. A., Schroeder, D. A., & Penner, L. A. (2006). *The social psychology of prosocial behavior*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Ekeh, P. P. (1974). *Social exchange theory: The two traditions*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Engelmann, D., & Fischbacher, U. (2009). Indirect reciprocity and strategic reputation building in an experimental helping game. *Games and Economic Behavior*, 67, 399-407.
- Förster, J. & Higgins, E. T. (2005). How global versus local perception fits regulatory focus. *Psychological Science*, 16, 631-636.
- Förster, J., Liberman, N., & Kuschel, S. (2008). The effect of global versus local processing styles on assimilation versus contrast in social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 579-599.
- Freitas, A. L., & Higgins, E. T. (2002). Enjoying goal-directed action: The role of regulatory fit. *Psychological Science*, 13, 1-6.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2001). The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1001-1013.
- Gorman, C. A., Meriac, J. P., Overstreet, B. L., Apodaca, S., McIntyre, A. L., Park, P., & Godbey, J. N. (2012). A meta-analysis of the regulatory focus nomological network: Work-related antecedents and consequences. *Journal of Vocational Behavior*, 80, 160-172.
- Grant, H., & Higgins, E. T. (2003). Optimism, promotion pride, and prevention pride as predictors of quality of life. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 1521-1532.
- Gu, J., Bohns, V. K., & Leonardelli, G. J. (2013). Regulatory focus and interdependent economic decision-making. *Journal of Experimental Social Psychology*, 49, 692-698.
- Higgins, E.T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- Higgins, E. T., Idson, L. C., Freitas, A. L., Spiegel, S., & Molden, D. C. (2003). Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1140-1153.
- Idson, L. C., Liberman, N., & Higgins, E. T. (2004). Imagining how you'd feel: The role of motivational experiences from regulatory fit. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 926-937.
- 稲葉陽二 (2011). ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ 中公新書
- Johnson, A. L., Crawford, M. T., Sherman, S. J., Rutchick, A. M., Hamilton, D. L., Ferreira, M. B., & Petrocelli, J. V. (2006). A functional perspective on group memberships: Differential need fulfillment in a group typology. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 707-719.

- Leimgruber, K. L., Ward, A. F., Widness, J., Norton, M. I., Olson, K. R., Gray, K., & Santos, L. R. (2014). Give What You Get: Capuchin Monkeys (*Cebus apella*) and 4-Year-Old Children Pay Forward Positive and Negative Outcomes to Conspecifics. *PLOS ONE*, *9*, e87035.
- Liberman, N., Idson, L. C., Camacho, C. J., & Higgins, E. T. (1999). Promotion and prevention choices between stability and change. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 1135-1145.
- Leikas, S., Lönnqvist, J. E., Verkasalo, M., & Lindeman, M. (2009). Regulatory focus systems and personal values. *European Journal of Social Psychology*, *39*, 415-429.
- 増田貴彦・山岸俊男 (2010). 文化心理学 [上] 心がつくる文化, 文化がつくる心 培風館
- Milinski, M., Semmann, D., & Krambeck, H. (2002). Reputation helps solve the 'tragedy of the commons'. *Nature*, *415*, 424-426.
- Nahapiet, J., & Ghoshal, S. (1998). Social capital, intellectual capital, and the organizational advantage. *Academy of Management Review*, *23*, 242-266.
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (2005). Evolution of indirect reciprocity. *Nature*, *437*, 1291-1298.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2012). 自己評価と接近回避志向: 制御焦点の活性化による相関関係の変化 対人社会心理学研究, *12*, 59-65.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. Simon and Schuster.
- Roese, N. J., Hur, T., & Pennington, G. L. (1999). Counterfactual thinking and regulatory focus: Implications for action versus inaction and sufficiency versus necessity. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 1109-1120.
- 佐藤有紀・五十嵐祐 (2014). 従業員の制御焦点が対人的援助行動に及ぼす影響—職場における互恵性信念と人間関係満足への媒介効果の検討— 産業・組織心理学会第30回大会論文集, 131-134.
- 白木優馬・五十嵐祐 (2014). プレゼントに伴う価値とコストが受け手の感謝および自発的返報動機と負債感に及ぼす影響 日本グループダイナミクス学会第61回大会発表論文集, 160-161.
- Sober, E., & Wilson, D. S. (1998). *Unto others: The evolution and psychology of unselfish behavior*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Stanca, L. (2009). Measuring indirect reciprocity: Whose back do we scratch? *Journal of Economic Psychology*, *30*, 190-202.
- Tajfel, H., & Turner, J. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-48). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Watanabe, T., Takezawa, M., Nakawake, Y., Kunimatsu, A., Yamasue, H., Nakamura, M., Miyashita, Y., & Masuda, N. (2014). Two distinct neural mechanisms underlying indirect reciprocity. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, *111*, 3990-3995.
- Wedekind, C. & Milinski, M. (2000). Cooperation through image scoring in humans. *Science*, *288*, 850-852.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造 こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、加藤仁氏、平島太郎氏（ともに名古屋大学大学院教育発達科学研究科）に貴重なご意見・ご指摘を賜りました。心より感謝申し上げます。

(2014年8月29日受稿)

ABSTRACT

Regulatory focus and social exchange in groups:
A scenario experiment on donating behavior

Yuki SATO and Tasuku IGARASHI

Social exchange in groups is important for the development and welfare of social groups. This study investigated the relationships between actors' regulatory focus and their social exchange in groups. Based on the regulatory focus theory (Higgins, 1997), we hypothesized that people with promotion focus (self-regulation based on approaching benefit) would behave more prosocially and expect higher reciprocity in their groups than those with prevention focus (self-regulation based on avoiding cost or risk). Forty-one female students participated in the experiment. After manipulations of regulatory focus, participants responded to a series of questions regarding fictitious donation scenarios: (1) participants decided how much money they would donate to a victim of a natural disaster who belongs to the same university as participants; (2) they estimated how much money the victim would donate to the participants themselves (direct reciprocity) or another student (generalized indirect reciprocity) in a similar situation; and (3) how much money participants would receive from a third-party student in their university if they fell into the same situation in the future (socialized indirect reciprocity). A 2 (regulatory focus) \times 3 (types of social exchange) ANOVA revealed that promotion-focused participants donated more money to the victim and expected higher reciprocity, especially in generalized indirect reciprocity, than those who were prevention-focused. The relationship between regulatory focus and preference for social exchange is discussed.

Key words: regulatory focus, social exchange, direct reciprocity, indirect reciprocity